



妊産婦の 情報収集・産後サポート・ 状況について



たまごクラブひよこクラブ編集部
統括部長 中西 和代

サマリー

初産婦は出産・産後について不安を抱きがちであり、
配偶者や親、友人、雑誌、インターネット、SNSなどから情報収集している。



サービス提供のツール(相談窓口等)として組み込むことで利用率UPが望める。
サービス周知のツール(広告・ニュース配信等)として有効利用する戦略も必要。

産後サポートの主な担い手としては、
里帰りや手伝いに来てもらうなどで実親に頼ることが多かった。
配偶者のサポートは家事より育児での関わりが強い傾向。

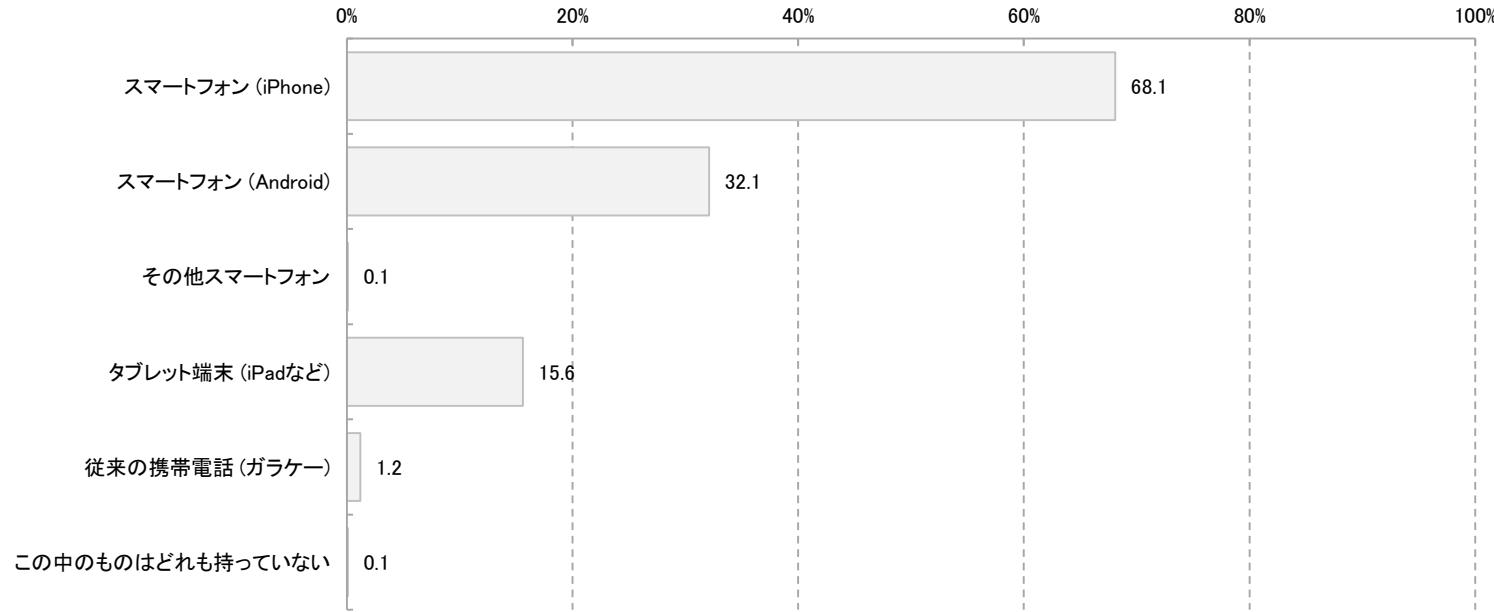


産後サポートのニーズは非常に高く、受けた人の満足度も高い。
全国的に共通で、すべての女性が妊娠中～産後に十分なケアを受けられ、すべての子どもが十分な医療・保育・食育を受けられるような、成育医療の体制づくりが望まれる。

情報収集について①通信機器の所有状況

あなたは現在、下記の通信機器をお持ちですか？
持っているものをお選びください。(いくつでも)

※プライベートで利用するものに限定してお答えください。

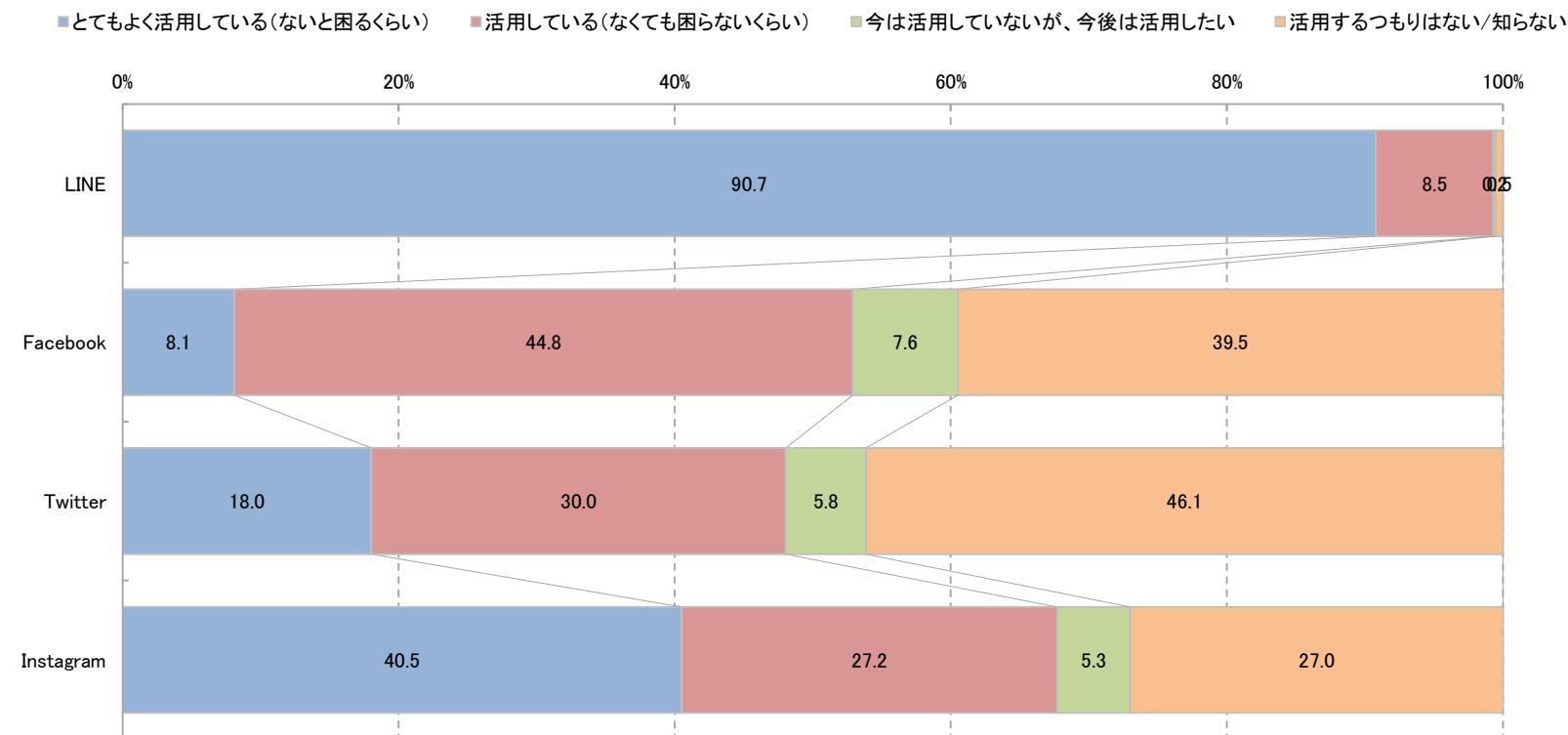


ネットアンケートのため、所有率が高くなる傾向はあるが、
ほぼ全員が何かしらの通信機器を所持している。

たまひよ 2018年11月実施(n=2060)
「妊娠や子育てに関するアンケート」より

情報収集について②SNSの利用状況

スマートフォンを持っているとお答えの方にお伺いします。
スマートフォンで以下のサービスを活用していますか？



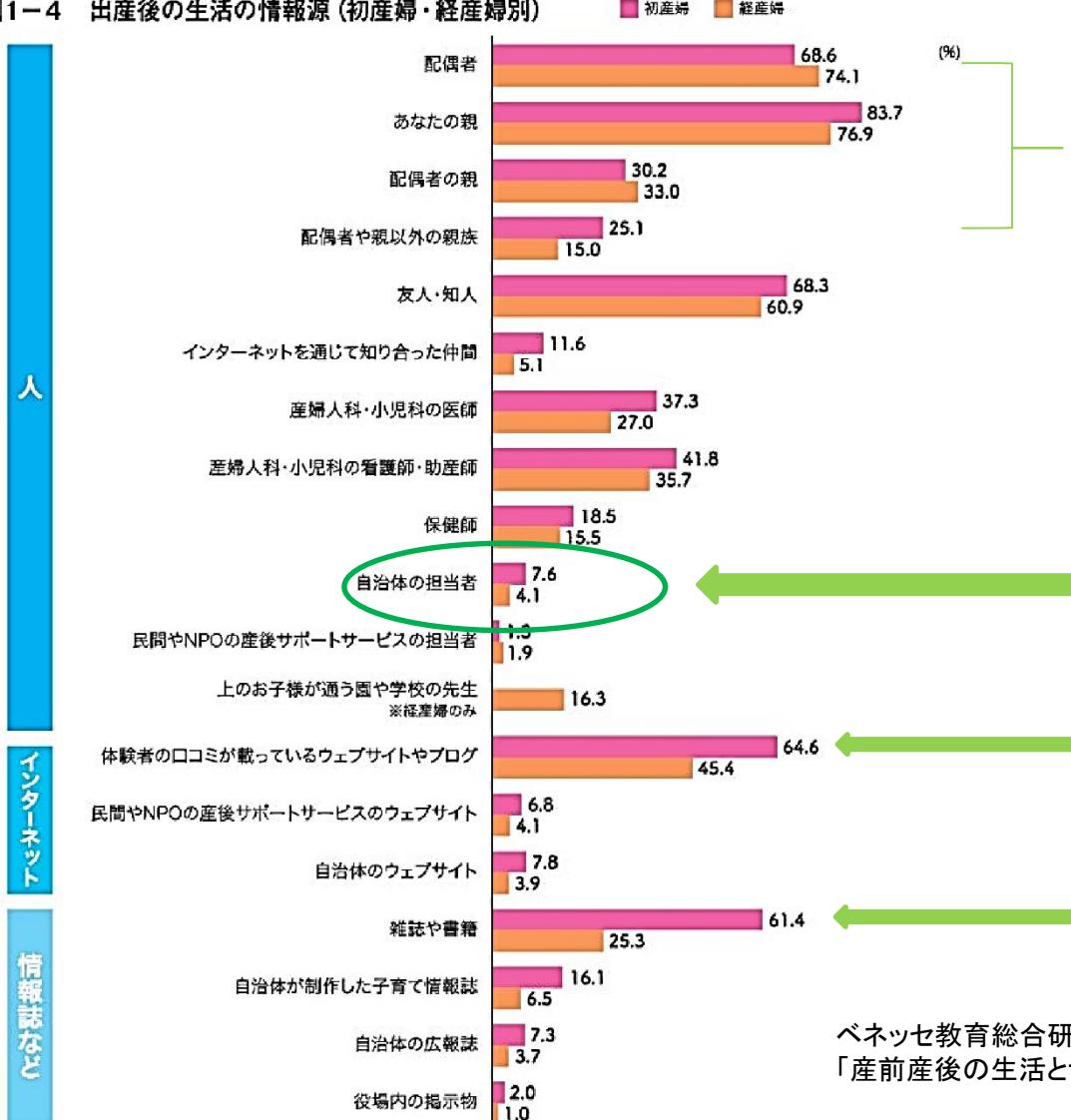
LINEが圧倒的人気。
次点はインスタグラム。

たまひよ 2018年11月実施(n=2060)
「妊娠や子育てに関するアンケート」より

情報収集について③産後の相談先

あなたが0歳4ヶ月～0歳11ヶ月のお子様（赤ちゃん）を妊娠中に、産後の生活についての情報を得るために相談したり、利用したりしたことがあるものをいくつでも選択してください。

図1-4 出産後の生活の情報源（初産婦・経産婦別）



配偶者、実親、
友人・知人が
上位3項目を占める

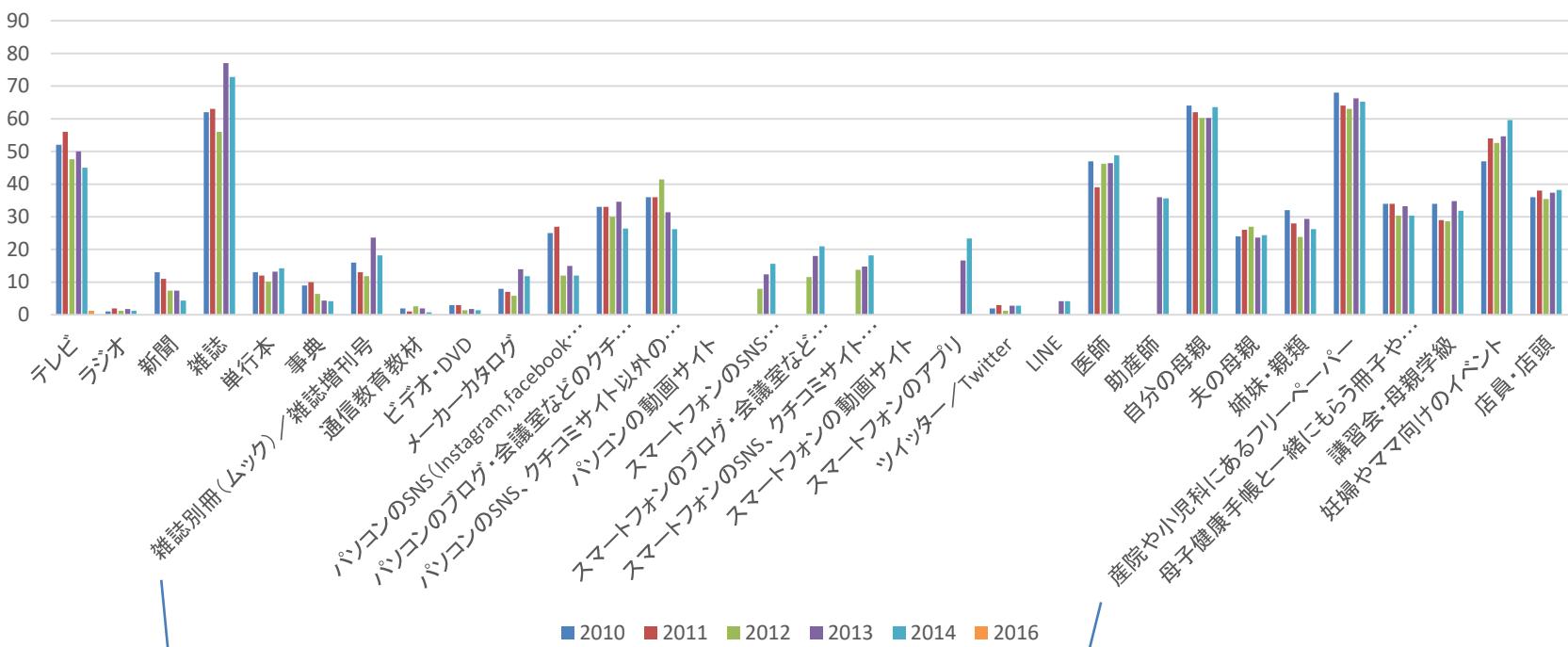
自治体からの
情報収集は
1割前後と少なめ

初産婦は
体験者の口コミ、
雑誌や書籍からも
情報を得ようとする傾向

ベネッセ教育総合研究所 2015年3月実施(n=1500)
「産前産後の生活とサポートについての調査レポート」より部分抜粋

情報収集について④妊娠期の情報源

妊娠期・妊娠前の情報源時系列



妊娠や妊娠するための体づくりなどの情報に関して、あなたが今までに参考にしたり利用したりしたことがあるものをすべて教えてください。

また、その中で最近半年以内で参考にしたり利用したことがあるものをすべてお選びください。

妊娠期は雑誌、産院や小児科にあるフリーぺーパー、イベントなどからの情報収集が、実母・医師と並んで高め。

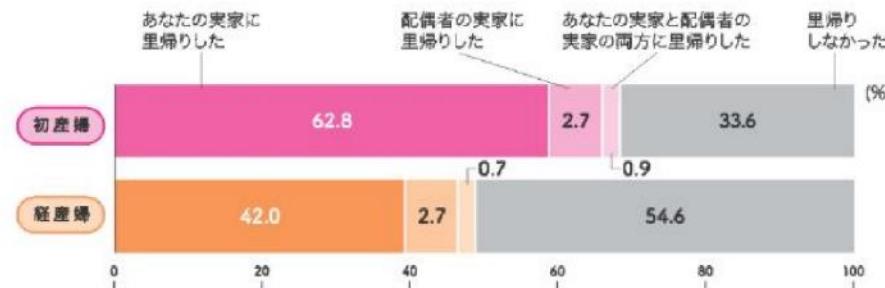
たまひよ経年調査より

産後のサポート状況①里帰り状況

Q

あなたは、0歳4ヶ月～0歳11ヶ月のお子様（赤ちゃん）の出産にあたり、あなた、または配偶者の実家に里帰りをしましたか。

図2-1 里帰りの状況（初産婦・経産婦別）

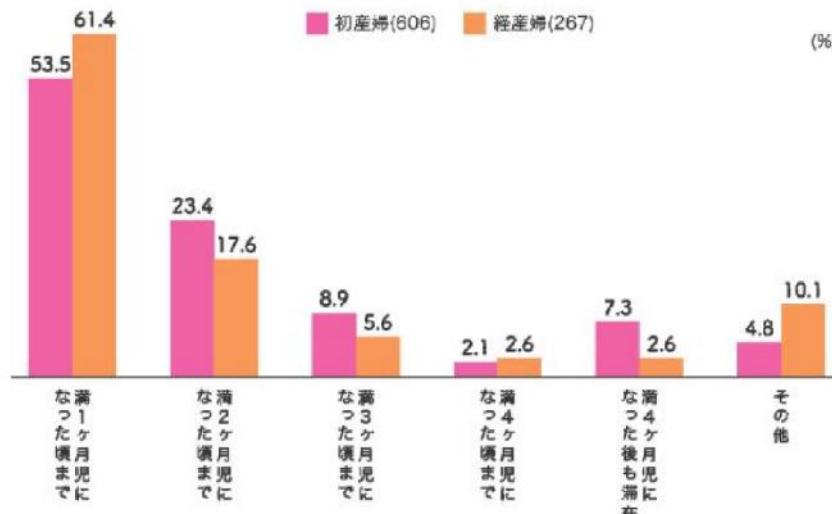


初産婦の6割、
経産婦の4割が
里帰りを
していた

Q

あなたは、赤ちゃんを出産後、いつ頃まで、あなた、または配偶者の実家に里帰りされましたか。

図2-2 出産後里帰りしていた期間（初産婦・経産婦別）



里帰りの期間は
1ヶ月が半数以
上。約8割が2ヶ月
までには戻ってい
た

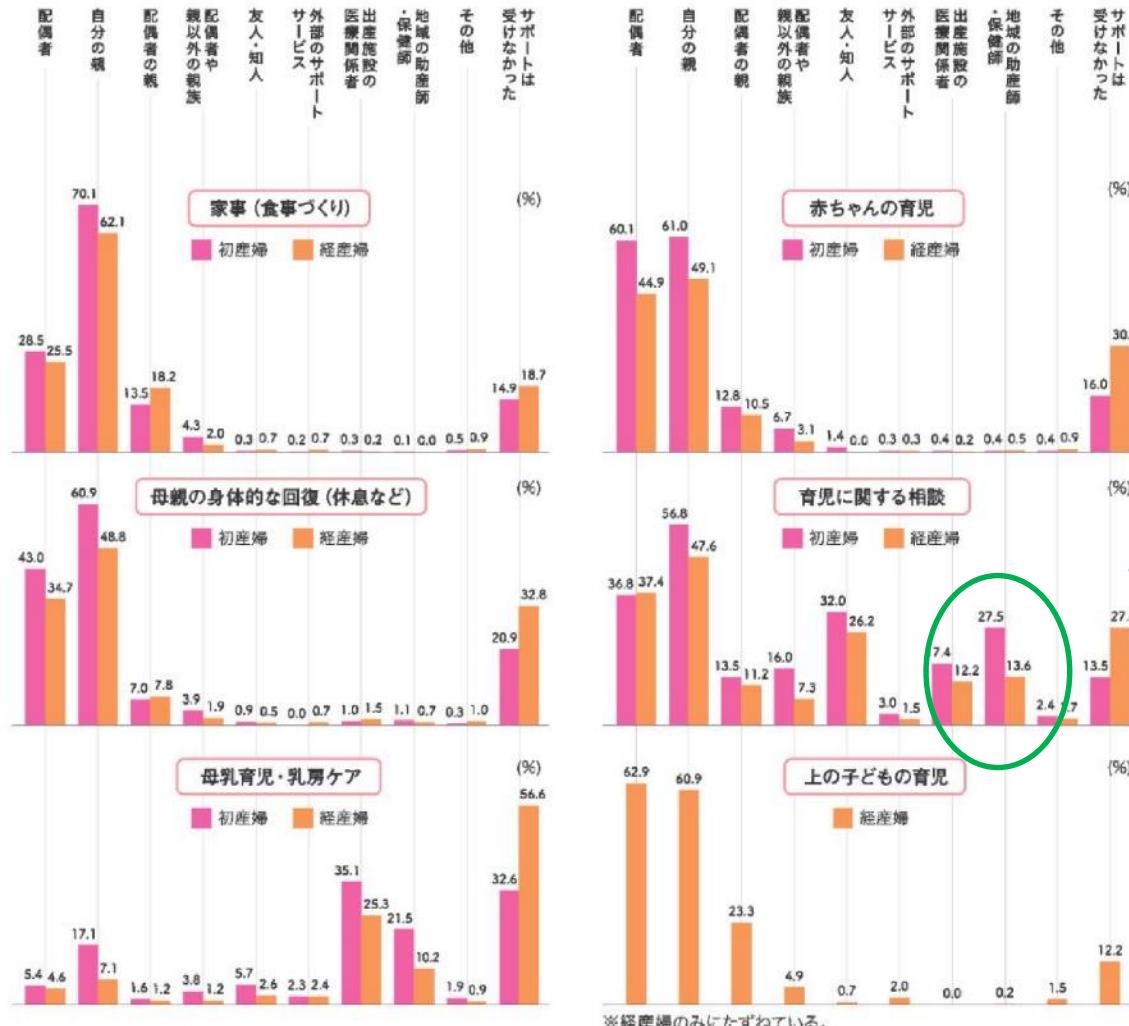
※図2-1で「里帰りした」と回答した人のみ。
※「満4ヶ月になった後も滞在」は、選択肢「満4ヶ月になった
後も滞在したが、今は里帰りしていない」と「現在も里帰り中」
の%の合計。

ベネッセ教育総合研究所 2015年3月実施(n=1500)
「産前産後の生活とサポートについての調査レポート」より

産後のサポート状況②サポートの担い手

Q

出産後4ヶ月間の間、生活や育児をどなたにサポートしてもらいましたか。あてはまるものをいくつでも選択してください。



「サポートは受けなかった」以外は複数回答。

外部のサポートサービス：自治体・民間・NPOなどが提供するベビーシッターサービスやヘルパーサービス。出産後対象のサービスも、対象時期を限定しないサービスも含む。

育児に関する
相談では、
友人・知人と
並び、地域の
助産師・
保健師も
担っている

ベネッセ教育総合研究所
2015年3月実施(n=1500)
「産前産後の生活とサポートについての調査レポート」より

産後のサポート状況③サポート満足度

Q

出産後4ヶ月の間、生活や育児に関して、何らかのサポートを受けた方にお伺いします。
それについて、どの程度満足しましたか。

図3-3 家事(食事づくり)

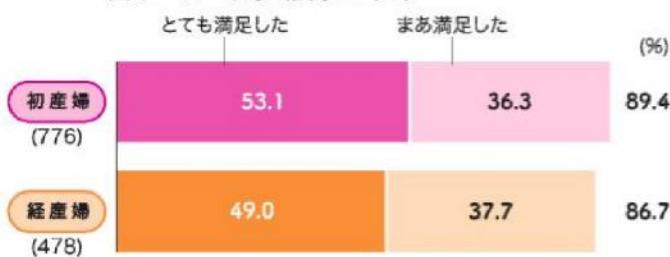


図3-4 赤ちゃんの育児



図3-5 母親の身体的な回復(休憩など)



図3-6 育児に関する相談

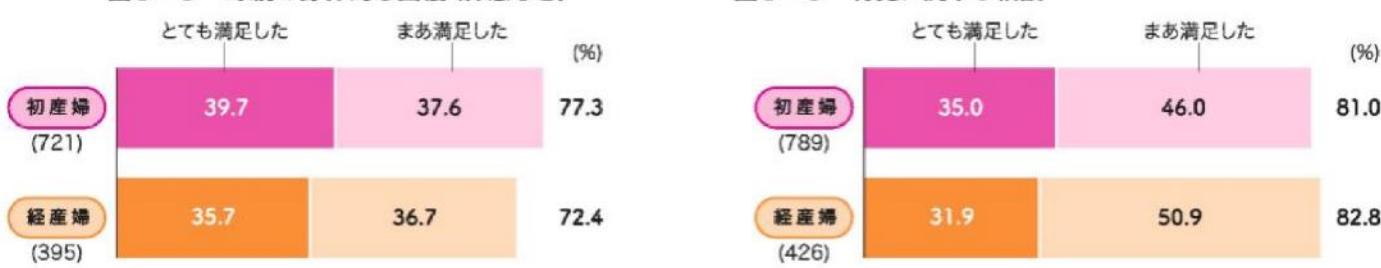


図3-7 母乳育児・乳房ケア

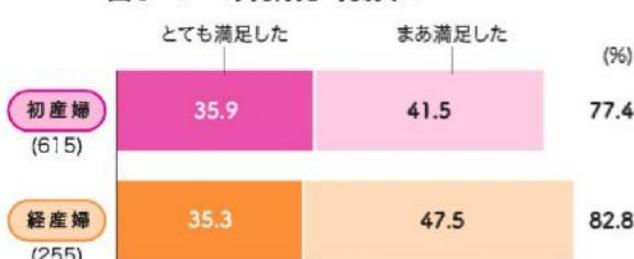


図3-8 上の子どもの育児



※経産婦のみにたずねている。

※各サポートを受けた人のみ。各サポートについて、「とても満足した」「まあ満足した」「どちらともいえない」「あまり満足しなかった」「全く満足しなかった」と回答したうち、「とても満足した」「まあ満足した」の%を図示。

7~8割
が、受け
たサ
ポートに
満足
してい
る。

ベネッセ教育総合研究所
2015年3月実施(n=1500)
「産前産後の生活とサポートに
ついての調査レポート」より



産後のサポート状況④満足した理由

- ①信頼する人のサポートを受けられたこと
- ②母親が休息することができたこと
- ③赤ちゃんの育児に専念できたこと
- ④相談に乗ってもらったり、話を聞いてもらったこと。

ベネッセ教育総合研究所 2015年3月実施(n=1500)

「産前産後の生活とサポートについての調査レポート」より

受けたサポートについて、総合的に満足した理由、満足しなかった理由を
自由に記述してもらった。回答のあった729件をコーディングして分析。

ママたちのリアルボイス①

たまごクラブ・ひよこクラブ読者および編集部周辺でリサーチ
設問「日本の成育医療体制について意見を」への回答から抜粋

【産後ケアに対して】

- 日本では、もっともっと「産後ケアセンター」を普及＆充実していただき、授乳など赤子のケアに対する正しい知識を教えてもらえる場の確保が必要ではないかと思います。
- 「ネウボラ(フィンランドの子育て支援。妊娠期から小学校就学まで、一人の保健師がワンストップで支援する)」を導入してほしい。とくに若くして出産した方、多胎児家庭に。
- いちばん悩む産後3カ月までの時期に、授乳・子育ての不安を解消してくれる安価なシステムがない(と感じる)。行政が頼りにならないから、みんなネットとかで相談するんです…。母乳外来に通って、うん十万元もお金を落とすんです…。
- 保健所のオンライン相談、小児科のオンライン受診を拡充してほしい。
- 新生児訪問の保健師とママの相性が合わず、ママが悩んだり追い詰められてしまうことがあるそうです。

【病児保育に対して】

- 拡充してほしいなと思うのは、病児保育です。
小さなT区に住んでいるからかもしれません、病児・病後児保育の差をすごく感じています。公的な病児保育は1件しかありません。他の区だともっとありますし、民間(病院とかが運営)もあります。
- 保育園児が病気になり、急に預けられないことは多々あると思うのですが、それに対して職場の理解を得ることに対するハードルの高さを感じます。
- 民間の病児・病後児シッターもありますが、民間、シッターというところで、信用しづらいというか、閉鎖された空間に、知らない大人と子供を1対1で対峙させるのは、病気の子でなくとも抵抗感があります。
- 民間の病児保育は高額です。たとえば、某病児シッターは、入会金3万円、月会費がその月の利用「0回」でも5100~5600円かかります。いつ使うかわからないものに、それだけのお金が出せるのは、年収1000万をゆうに超える家庭くらいかと。

【多胎児支援に対して】

- 多胎児支援が不足しています。

まず妊娠中、健診に通える病院・出産できる病院探しがかなり大変です。近所の産院は双子出産不可。健診だけでもお願いしようとすると「ウチで出産しない方の健診はできません」。里帰り先で双子を出産できる病院を見つけても「初期から健診に通える人でないと出産不可」。こう言われてしまうと働きながら、双子を生むのって無理なのではないかと思います。

【乳幼児医療費助成に対して】

- 東京都は「中学生まで医療費無料」ですが、近隣のC市ですら、乳幼児～小3で自己負担が0～300円、小4～中学生は0～500円、地方のU市やY市だと医療費無料は未就学児のみで、小学生以降は2割負担。医療に、それも子どもの医療に差があるのって…。ここは市区町村の範囲ではなく、国が統一してくれないかなと思いました。

【不妊治療に対して】

- そもそも、「働きながら子を望むこと」「子を育てていくこと」にこれほど罪悪感を感じさせる国ってないのでしょうか？ 以下3点は早急に改善すべきだと思います。
 - ①助成の年齢制限を引き上げる。40才過ぎても、まだ妊娠できます。
 - ②助成の収入制限を引き上げる。現状、厳しすぎる。富裕層にまで助成を広げる必要はないけど、中間層には手を伸ばしてあげてほしい。
 - ③保険適用の治療をつくる。不妊治療を贅沢品のままにしない。

ママたちのリアルボイス⑤

たまごクラブ・ひよこクラブ読者および編集部周辺でリサーチ
設問「日本の成育医療体制について意見を」への回答から抜粋

【夫の育休取得に対して】

- 友人の旦那さんは小学校教員。旦那さんは育休は取れたらいいけど、男性の育休は職場で前例もないし、育休取るとかふざけんなという言わずもがななまわりの空気感だそうで。おれの育休取得は、現実的に難しいね～と諦めました。子どもとかかわる小学校の先生ですら、そんな環境なのが悲しくなりますね。

【妊娠中の他科受診に対して】

- 同僚の話ですが、鼻腔炎になっていて耳鼻科にいったら、薬を処方してもらったけど、妊婦に100%安全といわれてないから「飲むなら自己責任で」と言われて、彼女は結局薬が飲めず、我慢していました。

→ 今回「成育医療体制について」と意見を求めたところ、産後ケアや病児保育だけでなく、不妊治療や夫の育休取得、ここでは紹介しなかったがマタニティハラスメントや、保育園問題、学校給食の安全性への不安など、多岐に渡る意見が返ってきた。これらは、やがて開設した施設の相談窓口に持ち込まれる内容といえるのではないか。

「成育医療」という名称のサポート制度に、対象である子育て世代の人々がどのようなサポートを期待するのか、どこからどこまでをサポートするのかを精査し、適材適所な体制を整えた上での始動が必要と考える。

【女性と産婦人科の関わり】

- 女性は妊娠可能となったら、早い時期から産婦人科と関わりを持つべき。
今は「妊娠を機に、生まれて初めて産婦人科を受診した」という女性も少なくない。知識不足から、生理不順などのトラブルがあっても我慢して放置してしまったり、望まない妊娠をしてしまう、若い女性もいる。身近なかかりつけ医として、早い年代から産婦人科と接点をもてるようになることが、これから日本には必要だと思う。

【新型コロナウイルス感染症のような有事対応も視野に】

- 新型コロナウイルスの影響で、この先、里帰りをしないで出産するということがふえそうです。そうなると、ワンオペ育児になっていくので、産後もそれを乗りきる方法が、必要になってくることが考えられます。また、どういうサポートが受けられるのかなど、情報が簡単に得られるといいのかなと思っています。
- 新型コロナウイルスにより、現在でも乳幼児健診再開への目途は立っておりません。当院では生後2週間健診・1ヶ月健診・3-4ヶ月健診・3歳健診をクリニックの全額負担により、当面の間無償で実施することとしました。個別健診についての方針が厚生労働省から出されてはいるものの、3-4ヶ月健診に行けぬままであるにも関わらず既に6,7ヶ月健診の案内が郵送されてきた世帯もあると聞きます。

→ 成育医療の課題は、「子育て」だけではなく、女性QOL向上に関わる。
有事の際もゆるぎなく頼れる存在であってほしい。